

カチコチ村のマルモチ ～空に咲いた優しさ～

【登場人物】

マルモチ：全身が凍りついたお餅。声は小さく、いつも震えている。

カボチャの魔女：洞窟に住む隠者。マルモチの「熱」を見抜き、旅を促す。

ハル：陽だまりの村に住むサンドイッチ。包容力のある優しい女性。

ピップ：果物の子供。無邪気で食いしん坊。

灰色村の村人たち：同調圧力が強く、異物を排除しようとする集団。

ナレーター：物語の全てを俯瞰する語り部。

EXT. 灰色の村 - 広場

どんよりとした厚い雲が垂れ込め、ゴーゴーと地吹雪が吹き荒れている。

住人の食べ物たちは皆、ボロ布を纏い、寒そうに歩いている。



ナレーター (V.O.) :

みんなは一人のために。一人はみんなのために…。ここは食べ物たちが暮らす『灰色の村』。貧しいけれど、自分たちの体を分け合って暮らす、とても優しい場所だ。

【イメージカット】

村人 A が自分の腕をちぎり、村人 B に渡す。

村人 B はお返しに自分の腹をちぎり、村人 A に返す。

村中で営まれる「優しさ」の交換。

EXT. 灰色の村 - 広場の隅

カチカチに凍りつき、青白くなったマルモチが座り込んでいる。

通りすがりの村人 C が、邪魔そうにマルモチを蹴り飛ばす。

村人 C :

どけよ、マルモチ！

村人 D :

石ころかと思ったぜ。

マルモチ：（震えながら）

ご、ごめんなさい…。でも、ボクだって、みんなみたいに…分け合いたいんだ。

村人C：

ハッ！ お前に何ができる？

村人D：

カチコチで、人から与えてもらうことしかできない、役立たずの「ごこくつぶし」が！

周りの村人たちが一斉に嘲笑する。

その声は吹雪にかき消されていく。

彼らはマルモチを見下すように眺め、声を揃えて唱和する。

村人たち：

ワン・フォー・オール！ オール・フォー・ワン！

その掛け声と共に、マルモチは村の境界線へと乱暴に突き飛ばされる。

雪の中に倒れ込むマルモチ。

EXT.道-夕

日が沈んだ道を一人歩くマルモチ。

足取りは重い。



INT.マルモチの家-回想

マルモチ、大粒の涙を流している。

マルモチ：（唇を噛み締め）

ボクは役に…立たない…ボクは…立たない。

マルモチ、鞆を手にとると、荷造りをはじめめる。

EXT.道-夜

マルモチ、一人寂しく歩いている。

吹雪の先に、怪しく光る洞窟の入り口が見える。

マルモチ、不思議そうに立ち止まる。

入り口に腰掛けているのは、古びたマントを羽織ったカボチャの魔女。

INT.洞窟の中-夜

焚き火の爆ぜる音。

マルモチ、テーブルで温かいカボチャのスープをご馳走になっている。

マルモチ、震える手で、一口飲む。



魔女：（マルモチを見下ろし）

そうかい。かわいそうに。村から追い出されてしまったのかい。

マルモチ：

…ボクだって、誰かの役に立ちたいのに。

マルモチ、スープを飲む手をとめ、淋しげな顔を浮かべる。

魔女：（目を細めて）

…坊や。ほんとうに人の役に立ちたいのかい？

マルモチ：（顔を上げ、目に力を込める）

ボクは…立ちたい！

魔女：（少し考えて）

…そうかい。それなら、南を目指すといい。

マルモチ：

南…？

魔女：

南にへ向かえば、きっとあんたに相応しい場所が見つかるはずさ。

EXT.洞窟の外-夜

旅立つマルモチ。

魔女はその背中に声をかける。

魔女：

坊や。一つだけ忠告してあげる。

マルモチ、振り返る。

魔女：

いいかい、人の役に立つっていうのは…恐ろしく気持ちがいいことなのさ。

マルモチ：

気持ちいい…？

魔女：

その快樂に溺れて、自分を見失わないように気をつけなさい。

マルモチ、意味を測りかねて立ち止まるが、やがて深く一礼して歩き出す。

EXT.道 - 朝

ひたすら南へ歩き続けるマルモチ。

雪が止み、地面から緑が芽吹き、色彩が戻っていく。

EXT.ひだまりの村の入り口

マルモチの目の前に見える村。

そこには、巨大な黄金色の太陽が、すべてを肯定するように降り注いでいる。



マルモチの肌が、じわりと赤みを帯びていく。

カチコチだった体が、内側からの熱で「ぷうっ」と大きく膨張していく。

表面にツヤが戻り、柔らかく瑞々しい質感へと変わる。



マルモチ、そっと自分の体に触れてみる。

マルモチ：

…あったかくて、おっきい。

EXT.ひだまりの村-道

ハル（O.S.）：

あら！ まあ！ なんて真っ白で、ふっくらしたお餅かしら。

マルモチが振り返ると、サンドイッチのハルが立っている。



マルモチ（自分の手を見つめて）

ボク…柔らかい。ねえ、ボク、柔らかいよ！

ハル：（優しく微笑み）

ふふ、当たり前じゃない。

マルモチ、嬉しそうに自分の体をいじっている。

ハル：

ねえ、少しだけ、あなたのその「体」を分けてもらえる？ お腹をすかせている子がいるの。

マルモチ：

うん！

マルモチ、すぐに体をちぎる。

ちぎられた断面からは、真っ白な湯気が立ち上る。

マルモチ：（ちぎった餅を渡す）

はい！

ハル：

どうもありがとう。

ハル、餅を受け取ると、笑顔で去っていく。

マルモチの顔に、生まれて初めての純粋な笑顔が咲く。

EXT.ひだまりの村-別の道

マルモチが歩いている。

今度は果物の子供・ピップが駆け寄ってくる。

ピップ：

あ！ お餅さん！ お餅を分けてくださいな！

マルモチ、喜んで体をちぎる。

ピップがそれを頬張り、満面の笑みを浮かべる。

ピップ：

どうもありがとう！

マルモチ：（確信に満ちて）

ボクだって、誰かの役に立てるんだ！



EXT.道

マルモチ、ひだまりの村を後にし、さらに南へと進む。

ナレーター (V.O.) :

マルモチは止まらなかった。誰かに必要とされる喜びを知った彼は、もっと遠くへ、もっと暑い場所へと向かった。

【イメージカット】

道中、会う人すべてに自分を分け与え、感謝の言葉を浴びるマルモチ。

EXT.常夏の村-海岸

ヤシの木が揺れ、太陽が真っ赤に燃える「常夏の村」。

マルモチはもはや、巨大な雪山のように膨張している。

村人たち :

マルモチさん！ ぼくにも！

村人たち :

わたしにも！

押し寄せる人だかりに、マルモチは誇らしげに自分をちぎり続ける。

その目はどこか、恍惚としている。

マルモチ：

ハルさん、見てて。ボク、もっとたくさんの人を…！

その時、マルモチの足が地面を離れる。

EXT.灰色の村

一方、その頃。

マルモチの故郷である灰色の村は未曾有の不作に襲われていた。

村人たち、げっそりと痩せこけ、空を仰いでいる。

不意に、雲の切れ間に「巨大な風船」のような白い塊が現れる。

村人 A：（不思議そうに）

…月か？

村人 B：

違う。あれは…



EXT.常夏の村

マルモチ、猛烈な上昇気流に乗って、空の頂点へ。

雲よりも高く、世界全体が見渡せる場所まで昇り詰める。

EXT.ひだまりの村

ハル、空に浮かぶマルモチを見上げている。

ハル

…マルモチさん。

EXT.洞窟の入り口-夕

魔女、入り口からマルモチを見上げ、独り言をつぶやく。

魔女：

…これも定めか。

EXT.夜空（空中）

パンパンに膨らみきったマルモチ。

その体はもはや限界を超えている。

下界を見つめるマルモチ。

灰色の村も、ひだまりの村も、すべてが自分を待っているように見える。

マルモチ：（叫ぶ）

イクゥー——————！！

静寂。世界から音が消える。

次の瞬間——。

ド————ン！！



夜空を真っ白に染め上げる、巨大な爆発。

それは悲しい別れではなく、温かな光の花火だった。

マルモチの声 (V.O.) :

ワン・フォー・オール、オール・フォー・ワン。

夜空から、雪のように「お餅の恵み」がキラキラと降り注ぐ。

世界中の空腹と、冷え切った心を包み込むように。

EXT.ひだまりの村-夜

ハル、手のひらに落ちてきた白い欠片を、そっと頬に当てる。

ハル :

…マルモチさん、あなたは最高の「優しさ」を与えてくれたのね。

EXT.灰色の村-夜

夜空から降り注ぐ贈り物。

かつてマルモチを蔑んだ村人たちが、それを一口食べ、嗚咽を漏らす。

村人 C :

マルモチ、許してくれ…。俺たちが間違っていた…。

村人たちの凍りついた瞳に、「優しさ」が蘇る。

EXT.夜空（空中）

マルモチを祝福するように、星がきらきらと輝いている。

ナレーター（V.O.）：

物語はこれで終わり。…もし、君の心がカチコチになったら、思い出してほしい。その孤独もいつか、誰かを温める「優しさ」に変わるかもしれないってことをね。

【完】